



TITLE:

「三國演義」における趙雲像

AUTHOR(S):

上野, 隆三

CITATION:

上野, 隆三. 「三國演義」における趙雲像. 中國文學報 1987, 38: 86-114

ISSUE DATE:

1987-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177434>

RIGHT:

『三國演義』における趙雲像

上野 隆 三

京都大學

一 はじめに

『三國演義』（以下『演義』と略す）において、趙雲という武將は決して中心的な人物ではない。しかし、脇役と言っ
てしまふこともできない存在である。

『演義』の中での趙雲のイメージは、ひとことで言えば、
『膽大心細』^①（大膽かつ細心）ということになろう。張飛
のように、奇想天外、八方破れな行動をとるおもしろさは
ないが、それなりに安心感の持てる武將である。このよう
な『演義』における趙雲像はどのようにしてできていった
のか。また、それに伴って、『演義』の作者は趙雲^②にどの
ような役割を持たせようとしたのか。そういったことを、

主に『演義』と『三國志』を比較し、『三國平話』^⑤（以下『平話』と略す）なども参照しながら見ていきたいと思う。

二 趙雲の登場

趙雲が『演義』に初めて登場するのは、第七回である。

概略を次に記す。冀州の攻略に關して、袁紹が公孫瓚をだ
ましたため、兩者が磐河で戦うこととなる。公孫瓚が袁紹
の部將文醜に追いつめられた時、横合いから少年が飛び出
して文醜に打ってかかり瓚を助ける。名を尋ねると、常山
郡眞定縣の人、姓は趙、名は雲、字は子龍であるという。

瓚曰：「將軍自何來，救我一命？」雲曰：「某本袁紹
轄下之人。今見袁紹無匡國救民之心，特來相投麾下，
不期此處相見。」瓚執雲手曰：「聞貴郡之人皆願傾心
以投袁紹，公何獨回心見某也？」雲曰：「方今天下滔
滔，民有倒懸之危。雲願從仁義之主，以安天下，非特
背袁氏以投明主。」（瓚が助けてくれた理由を問うと、
趙雲は、もともと袁紹に仕えていたが、紹に國を助け
人民を救う心が無いので、瓚の配下に加わるために來

る途中にたまたまここで出會つたのだ、と言う。瓚が、あなたの郡の人はみな袁紹につくことを願っていると聞が、あなたは どうして一人だけ心を變えて私のところへ來たのか、と問うと、雲は、今天下は亂れ人民は非常に苦しんでいる。自分は仁義のある主に仕え天下を安んじようと願っているので、別に袁氏を裏切つてあなたについたわけではない、と言う。

次に『三國志』の「趙雲傳」の最初の部分を引用する。

趙雲字子龍、常山眞定人也。本屬公孫瓚、

〔裴松之注〕雲別傳曰：雲身長八尺，姿顏雄偉，爲本郡所舉，將義從吏兵詣公孫瓚。時袁紹稱冀州牧，瓚深憂州人之從紹也，善雲來附，嘲雲曰：「聞貴州人皆願袁氏，君何獨迴心，迷而能反乎？」雲答曰：「天下誦訥，未知孰是，民有倒縣之厄，鄙州論議，從仁政所在，不爲忽袁公私明將軍也。」遂與瓚征討。

この場面に關しては、情況は少し異なるが、『演義』と「趙雲傳」は内容はほとんど同じである。とくに二人の會話の内容は全く同じと言っていいほどである。ただ「趙雲

『三國演義』における趙雲像（上野）

傳』では、平時に趙雲が公孫瓚の所にやってきたが、『演義』でそれを戦闘場面とし、趙雲が豪快な登場の仕方をするのが書き加えられているのは、『演義』の作者のアイディアであろう。また趙雲が少年として登場するのも『演義』だけである。（「趙雲傳」では雲は年齢不詳であるし、『平話』にもそのような記載は無い。）これによって、趙雲の若さと力強さが讀者に強く印象づけられることになる。『平話』での趙雲は袁紹の部下として登場し、公孫瓚とは何の關係も無い。

次に、趙雲が劉備の部下になる場面は、『演義』では第二十八回。

公孫瓚が袁紹に討たれ、趙雲は流浪の身となっている。袁紹を頼っていた劉備は、曹操のもとに一時身を寄せていた關羽と再會。關羽は許昌から脱出する、いわゆる「千里獨行」の途中に周倉を部下にしたが、その周倉が山賊だった時の根據地、臥牛山に劉備らが行くと趙雲が塞を乗っ取っており、雲は劉備と再會してその部下となる。

『三國志』の「趙雲傳」の本文では、公孫瓚が劉備を派

遣して田楷を助け袁紹の軍を防がせた時、趙雲が劉備について行つて備の主騎となつたとあり、また裴注では「趙雲別傳」を引いて、劉備が袁紹のもとに居た時、鄴で趙雲と會つて、二人で荊州へ脱出したとなつてゐる。^⑧

このように、『演義』のこの場面が「趙雲傳」から取つたものでないことは明らかである。『平話』にもこういった話は無い。『平話』では、曹操のもとに居る關羽が袁紹の部將顏良と文醜を斬り、袁紹を頼つてゐた劉備は命が危なくなるが、趙雲の辯護により助かる。そして劉備は關羽を説得に行くよう命じられ、趙雲はその監視役として同行するが、備は途中で落ちのびようとし、雲は家族を捨ててともに荊州に向かう、という内容である。この、袁紹の陣から脱出する話は、「趙雲傳」の裴注の記載と似てゐるので、それをもとにしたものかも知れない。『演義』にも第二十八回にこれと同様の話は有るが、劉備の監視役は趙雲ではなく簡雍がつとめる。

結局『演義』のこの場面は「趙雲傳」にも『平話』にもなく、従つて作者の創作である可能性が高い。趙雲が偶然

に劉備らと出會う劇的な展開と、趙雲の武勇を示す場となつてゐる。

「趙雲傳」の本文にある、劉備が田楷のために袁紹と戦いに行くという話は『演義』には無い。ただ第十一回に、陶謙が曹操に攻められ、劉備、孔融、田楷が救援に行く話がある。「先主傳」には、この二つの話は別のこととして書かれてゐるが、『演義』の第十一回では劉備は救援に向かう前に公孫瓚に二千の兵と趙雲を借り受けてゐる。この時は趙雲は再び瓚のもとに戻るが、ここで趙雲がでてくるのは「趙雲傳」を参考にしたためかも知れない。

『演義』の作者は、普通はできる限り史實に忠實であらうとしてゐるのに、どうしてここでは「趙雲傳」の本文をそのまま採用しなかつたのか。それは、公孫瓚の部下であつた趙雲が劉備の部下になることは、趙雲が瓚を裏切ることになる恐れがあるからではないか。趙雲は後に二度も阿斗を救うなど忠義の臣であつた。その忠義の臣がいかなる事情にしろ、主人を變えることは問題があるわけである。ただそう考えると、『演義』で最初袁紹の部下であつた趙

雲が公孫瓚についたことは裏切りではないのか、という疑問が生ずる。しかし、『演義』において袁紹が「悪玉」であるのに對して、公孫瓚はどちらかと言えば「善玉」として描かれている。『三國志』の「公孫瓚傳」を見ると、瓚は實際はかなりの食わせ者だったようだが、『演義』における「善玉」と「悪玉」は、劉備を中心とする利害關係によつて成立しているので、劉備を取り立てて面倒を見た公孫瓚は必然的に「善玉」となるわけであろう。従つて『演義』の作者としては、「悪玉」の袁紹を裏切ることには許しても、「善玉」の公孫瓚を裏切ることには認めないわけにはいかなかったのではなからうか。そこで『演義』の作者は、趙雲が瓚の死後劉備の部下となるようにした、と考えられる。

三 趙雲の活躍

ここでは、趙雲が中心人物となつて活躍する部分について見て行く。

(a) 長阪坡趙雲救主

まず『演義』から。(第四十一、四十二回)

曹操が大軍を率いて攻め寄せ、劉備らは樊城を捨てて江陵へ向かう。しかし、劉備が後をついてくる十數萬の百姓たちを見捨てることができなかつたため、行軍は遅く、ついに當陽で曹軍に追いつかれて大敗。劉備は妻子や多くの將軍たちとはぐれる。その時、傷を負つた糜芳がやつて來て、「趙雲が寢返つて曹操に投降した。」と告げる。しかし劉備は信じず、趙雲を殺してやると息巻く張飛に「吾料子龍必不棄吾也。(子龍は決して私を見捨てたりはしないとと思うぞ)」と言う。

趙雲は劉備の妻子をさがして戰場を駆けまわり、ようやく百姓たちの中にいる甘夫人を見つける。そして、長阪橋に戻つて張飛に甘夫人を預け、再び亂軍の中へ。そして糜夫人と阿斗が人家の塀のかげにひそんでいるのを發見するが、深手を負つていた糜夫人は阿斗を趙雲に託した後、井戸に身を投げて自殺する。趙雲は阿斗を懷に抱いて、襲つてくる曹軍の將五十餘人をなぎ倒して歸還する。

次に『三國志』の「趙雲傳」を引用する。

及先主爲曹公所迫於當陽長阪，棄妻子南走，雲身抱弱子，卽後主也，保護甘夫人，卽後主母也，皆得免難。

（裴注）雲別傳曰：初，先主之敗，有人言曰北去者，

先主以手執撻之曰：「子龍不棄我走也。」頃之，雲至。

この事件によって、趙雲は一躍その名をとどろかす。趙

雲の一生における最大の功績であったため、『演義』と『三國志』の根本的な内容は同じで、『平話』の内容も『演義』のそれとほとんど同じである。『演義』の中の、糜夫人が

趙雲に阿斗を託して自殺する話は『三國志』には無く、『平話』に基づいている。『平話』では糜夫人ではなく甘夫人

がこの役をする事になっているが、この當陽長阪の役で甘夫人が生還することは、前掲の「趙雲傳」でも、同じ

『三國志』の「二主妃子傳」の「甘皇后傳」^⑨でも明らかで

ある。従って『演義』の作者はこの役目を糜夫人に與え、甘夫人はその前に趙雲に救われる、という形を取ったのである。糜夫人は、『三國志』の中では「糜竺傳」に^⑩妹を差し出して先主の夫人とした。^⑪とある以外全く記載はな

い。『演義』の作者としては、こういった役目を與えるためには非常に都合が良かったと言えよう。できる限り正史に忠實たんとした作者の姿勢のあらわれとも言える。

また、『演義』の中の、曹操が趙雲を生け捕りにするよう命ずる話、趙雲の乗っていた馬が穴に蹄をひっかけて転倒する話、趙雲が阿斗を劉備に手渡した時、備が阿斗を地面に投げつけ、こいつのために大將を一人失うところであった、とのしる話なども、全て『平話』に基づいている。結局この場面は、『三國志』をふまえながら、『平話』に肉付けすることによってできたものと言えそう。

(b) 趙雲截江奪幼主

『演義』は第六十一回。

劉備は、龐統・黃忠・魏延とともに西川へ行く。龐統らは劉璋を殺して西川を奪うよう勧めるが、劉備は璋と同族であるので承知せず、璋の要請により葭萌關に駐屯することとなった。このことを聞いた孫權は荊州を奪い返す好機と喜ぶが、權の妹を劉備に嫁がせている吳國太は許さない。そこで孫權は張昭の進言により、吳國太が病氣であると稱

して妹である孫夫人を阿斗とともに呼び戻す計畫を立て、周善を荊州に派遣する。周善は言葉巧みに説得し、孫夫人は阿斗を抱いて用意された船に乗る。これに氣づいた趙雲は、ただ一騎で後を追って船に乗り移り阿斗を奪い返す。しかし、船を止めることができず、趙雲がまさに進退極まった時、張飛が十餘艘の船とともに呉の船の行手をさえぎる。張飛は周善を斬り捨て、趙雲と阿斗を救い、孫夫人はそのまま呉に歸す。

この部分は『三國志』の「趙雲傳」の本文には無く、裴松之の注に「趙雲別傳」からの引用としてあるだけである。

(裴注) 雲別傳曰：此時先主孫夫人以權妹驕豪，多將吳吏兵，縱橫不法。先主以雲嚴重，必能整齊，特任掌內事。權聞備西征，大遣舟船迎妹，而夫人內欲將後主還吳，雲與張飛勒兵截江，乃得後主還。

また、『三國志』の「二主妃子傳」の「穆皇后傳」にも記載がある。

先主既定益州，而孫夫人還吳。

(裴注) 漢晉春秋云：先主入益州，吳遣迎孫夫人。夫

『三國演義』における趙雲像（上野）

人欲將太子歸吳，諸葛亮使趙雲勒兵斷江留太子，乃得止。

この事件によって、趙雲は二度後主を救うという功績をあげることとなる。しかし、「趙雲傳」の裴注では、趙雲が張飛とともに阿斗を救った事實と、劉備が趙雲を信頼して驕慢な孫夫人對策を含めた奥向きのことを任せたといい事實とを並列しており、趙雲の武勇よりも、その事務的な能力の高さがうかがわれる。『平話』にはこの話は無い。

(c) 趙子龍大破魏兵

『演義』は第九十一、九十二回。

諸葛孔明は後主に「出師の表」を奉呈し、北伐の準備にとりかかる。しかし、趙雲は高齢を理由に北伐軍に漏れたため憤激する。そこで孔明は趙雲と鄧芝に先鋒を命ずる。

魏軍の指揮官夏侯楙は韓徳を先鋒とし、趙雲は韓徳と對陣。雲は韓徳の武勇で知られる四人の息子を全て討ち取って大勝。翌日、雲は韓徳を討ち取るなど再び大勝する。その翌日、趙雲はまた魏軍と戦うが計略によって包圍され、さすがの趙雲も死を覺悟した時、張飛の息子張苞、關羽の

息子關興に助けられ、ともに魏軍を撃退する。

この話は『三國志』にも『平話』にも無く、作者の創作と考えることができる。ここでは老將趙雲の未だ衰えざる力を強調しながらも、若い張苞、關興に助けられるところに時代の流れを感じさせる。

しかし、前回の第九十回まで、趙雲は孔明の南征に同行し、活躍していたにもかかわらず、ここでいきなり七十すぎの「老將」となってしまうのはいささか不自然である。趙雲に限らず、關羽も同じことが言える。關羽の場合は第七十三回で、

「吾大丈夫、年近六旬、死何憾焉！（わしは大丈夫ではあるが、年も六十に近くなった。死んでも悔いは無い。）」

という言葉があるまで、讀者は關羽の年齢を全く忘れていた。このことについて、山本健吉氏は、

「物語作者が讀者をあざむいていたことをこういふときほど痛感することはない。すぐれた物語は、時間を蕩盡してしまう。わずかに數か年のことかと思っていると、あにはからんや、數十年が経過してしまっている。物語の時間

は、極度に壓縮された時間である。われわれがだまされたと氣づくのは、物語の時間から現實の時間へたち返ったときだ。白髮白髯の關羽に驚いたとき、讀者は意識をとり戻し、夢から現實に立ち戻り、物語の時間をふりかえり、心に噛みしめるのだ。^①」

と書いておられる。確かに『演義』を讀んでいても、「時間」というものを感じることはほとんど無い。従って、關羽や趙雲が年老いた、という記述が出てくると、初めて「時間」の存在を思い出すことになる。ことに趙雲の場合、登場した時の少年のイメージがずっと脱けなかったため、「老將趙雲」となった時の衝撃はより大きなものである。

この他、『演義』の第五十二回（趙子龍智取桂陽）は、趙雲が桂陽を攻め、はかりごとを用いて太守趙範を捕える話。第七十一回（趙子龍漢水大戰）は、趙雲が大活躍をして黃忠と張著を壓倒的多數の曹軍の中から救い出し、さらに計略によって曹軍に大勝する話。これらは「趙雲傳」の裴注をもとにしている。第五十二回の方は、『演義』では趙雲のにらんだ通り趙範は反亂し再び雲に捕えられるが、

裴注には、範が逃亡したとあるだけである。^⑫裴注では、結局趙雲が女色に迷わなかったことと、趙雲の判断力の鋭さが記されており、『演義』ではそれに趙雲の戦う場面をつけ加えているということになる。^⑬第七十一回の話は、「趙雲傳」の本文と裴注の中で最も趙雲の武勇があらわれている部分で、『演義』の内容と全く異同は無い。しかも、わざと門を開けて伏兵がいるように思わせるという計略を用いており、戦略にも秀でていたことをうかがわせる。

そして第九十五、九十六回では、街亭で馬謖が敗れ、箕谷で疑兵となっていた趙雲と鄧芝も退却するが、雲は後詰となり計略をもって魏軍を破って一兵も失わずに歸還する。これは「趙雲傳」の本文にあり、内容は同じである。^⑭

(d) 玄德躍馬跳檀溪

これまでは、『演義』の中で趙雲が中心的な働きをする部分について見てきたが、次に趙雲が中心ではないが重要な役割を持つ場面について見て行く。

『演義』は第三十四、三十五回。

劉備は荊州の劉表のもとに居り、劉表に勧められ新野に

『三國演義』における趙雲像（上野）

駐屯する。蔡瑁と、劉表の妻である蔡夫人は、劉備を亡きものにせんと圖り、襄陽での會合へ劉備の出席を求める。

劉備は趙雲と三百の兵士とともに赴く。蔡瑁は東・南・北の城門を固め、趙雲を別席に連れだし劉備暗殺を圖るが、伊籍が密かにこれを告げ劉備は的盧にまたがり西門から脱出。劉備は檀溪の岸に追いつめられるが、的盧が檀溪を飛び越え奇跡的に助かる。一方趙雲は劉備がいなくなったことに気づき、兵を率いて蔡瑁に行方を尋ねるが瑁は知らぬ存ぜぬの一點張り。趙雲はあたり一帯を搜したが何の手掛りも無く、城内の伏兵を恐れてひとまず新野へ歸還。

『三國志』は「趙雲傳」にはこれに關する記載は無く、「先主傳」の裴注にある。

世語曰：備屯樊城，劉表禮焉，憚其爲人，不甚信用。曾請備宴會，蒯越、蔡瑁欲因會取備，備覺之，僞如廁，潛遁出。所乘馬名的盧，騎的盧走，墮襄陽城西檀溪水中，溺不得出。備急曰：「的盧，今日厄矣，可努力！」的盧乃一踊三丈，遂得過，乘桴渡河，中流而追者至，以表意謝之，曰：「何去之速乎！」

『平話』では、劉備たちが劉表のもとへやって來、表の部將蒯越、蔡瑁が備を今のうちに殺してしまおうと畫策。備を辛治（新野）の守りにつかせるよう表に進言し、それが認められると、關羽、張飛を先に行かせ、劉備を襄陽城外での酒宴で暗殺しようとする。しかし、刺客の一人が劉備にこれを告げ、備は的盧に乗って逃亡。檀溪の岸に追いつめられるが、的盧は一跳びに檀溪を越えてしまう。

このように『演義』、『三國志』の裴注、『平話』とも主な内容は同じである。しかし、『三國志』と『平話』には趙雲は登場しない。元雜劇に「劉玄德獨赴襄陽會」があり、これについては後で述べるが、その中でも趙雲は劉備とともに襄陽へ赴くことはしない。従って、『演義』の中で趙雲に劉備の護衛をさせたのは、『演義』の作者であるようだ。『三國志』にも『平話』にも劉備と同行した部將の名は無く、元曲では單獨で行ったことになっているが、『演義』の作者は護衛する將軍が居ないはずはないと考えて、趙雲を起用したものと思われる。

毛宗崗は、「もし張飛であれば蔡瑁を殺しただろうし、

關羽であれば蔡瑁を人質として劉備を捜させたであろう。

關・張・趙三人の忠勇なことは同じだが、趙雲の人となりは極めて綿密であり、極めて落ち着いている。^⑧と言っているが、確かに趙雲の慎重さがあらわれている場面である。

(e) 錦囊計趙雲救主

『演義』は第五十四、五十五回。

孫權と周瑜は、權の妹を嫁がせると劉備をだまして江東に招いて捕え、荊州と交換しようと言畫。劉備は孔明に相談するが孔明は行くよう勧め、趙雲に三つの計略の入った錦囊を授けて備に付き添わせる。趙雲は第一の錦囊の計により、兵士たちに婚禮の噂を廣めさせ、劉備には喬國老に婚禮の話聞き、しかもそれが策略だと知った吳國太は激怒し、孫權は劉備を捕えることができなくなる。吳國太と喬國老は劉備が氣に入って、本當に孫權の妹を嫁がせる。

劉備は孫夫人とともに遊びにふける。趙雲は第二の錦囊の計により、荊州が曹操に攻められて危ないと劉備に告げる。劉備は孫夫人とともに元日に逃げることを決める。逃げた劉備、孫夫人、趙雲らを陳武、潘璋が追ひ、徐盛、丁奉が

前をさえぎる。第三の錦囊の計によって、劉備が孫夫人を怒らせて呉將たちをかしこまらせて逃げる。孫夫人を斬る許しを得た蔣欽と周泰がこの呉將たちと合流し、再び追って来る。劉備らは長江に出ると、待っていた孔明の船に乗り込む。すると今度は周瑜の水軍が追って来るが、對岸に上がったところを待ち構えていた關羽らに攻められ大敗。

『三國志』の「趙雲傳」にはこの話は無い。劉備が自ら江東に赴いたとあるのは「先主傳」である。

劉琦病死，羣下推先主爲荊州牧，治公安，權稍畏之，進妹固好。先主至京見權，綢繆恩紀。

『平話』では、周瑜が孫權の妹を荊州に送って劉備に嫁がせ、備を殺させようとする。しかし周瑜の計畫がことごとく見破られ、孫夫人も酒に乗じて劉備を殺そうとするができない。劉備は共に呉に行つて欲しいと夫人に頼まれて承諾。孫權は劉備を殺そうと圖るが、太夫人（吳國太）の叱責により思いとどまる。劉備は權と太夫人に別れを告げ、孫夫人とともに歸途につく。長江の南岸にいた周瑜と甘寧が追いつがるが孫夫人の一喝に手が出ず、劉備らは無事長

『三國演義』における趙雲像（上野）

江を渡る。

『演義』の内容は『平話』をもとにしているようだが、完全に同じではない。しかし趙雲が劉備に同行したとも、孔明が趙雲に三つの錦囊の計を與えたことも、『演義』以外には書かれておらず、これも『演義』の作者の創作の可能性がある。ただ錦囊計は非常に雜劇的な内容であり、現存しない元曲の中にある話かも知れない。(d)の「檀溪」と同様、ここでも趙雲は護衛として起用されているのは注目すべきである。

(三)では趙雲の活躍する場面について述べてきたが、まとめてみると、(a)、(b)、(c)のように趙雲が中心になる場面では、(c)を除いて全て『三國志』の「趙雲傳」にあり、大體内容も同じでそれをふくらませている形である。(d)、(e)のように中心ではないが重要な役割を果たす場面では、その話は『三國志』にあっても、趙雲は關係していないということである。従つて(d)、(e)のような場面で趙雲を起用したのは、『演義』の作者の意志であろう。

四 趙雲諫言

次に、『演義』の中で趙雲が劉備を諫めたり、孔明に進言したりする場面を見て行く。

まず、『演義』の第六十五回。

劉備は益州を平定したあと、成都の民有の田地や家屋を諸官に分配しようとした。そのとき趙雲が諫めて言う。

「昔者霍去病以匈奴未滅、將士安用爲家。何況今日國賊暴虐、不同匈奴、豈可求安也？須待天下都定、然後各還鄉里、歸耕本土、乃其宜耳。益州人民、累遭兵火、田宅皆空。今歸還百姓、令安居復業、方可使出賦役、自然心服。不宜奪之爲之爲私愛也。」

（昔、霍去病は匈奴がまだ滅んでいないのに將士が家を作るのはむだだと考えました。まして今日の國賊の暴虐さは匈奴以上であるのに、どうして平安を求めることができましよう。天下が完全に平らぐのを待つてから、それぞれ郷里に歸り、農業をするのが一番適切であります。益州の民衆は度重なる兵火に見舞われ、

田地も屋敷も荒れ放題でございます。今はこれを民衆に返し、安心して仕事に戻れるようにし、それから賦役を行なえば、自然と心服するでしょう。これを奪つて私的な褒賞として分け與えるのはよろしゅうございせん。）

この部分は、「趙雲傳」の裴注とほとんど同じである。次に引用する。

雲別傳曰：益州既定、時議欲以成都中屋舍及城外園地桑田分賜諸將。雲駁之曰：「霍去病以匈奴未滅、無用家爲、今國賊非但匈奴、未可求安也。須天下都定、各反桑梓、歸耕本土、乃其宜耳。益州人民、初罹兵革、田宅皆可歸還、令安居復業、然後可役調、得其歡心。」『演義』と「趙雲傳」のこの部分を比較すると、『演義』は「趙雲傳」をわかりやすく直しただけと言える。

次に『演義』の第八十一回では、趙雲は吳を攻めようとする先主に對して、「國賊曹操は孫權の比ではありません。まず魏を滅ぶべきであつて、そうすれば吳も自然と服従するでしょう。今曹丕が帝位を篡奪し、神人ともに怒つて

います。陛下には早急に關中を手に入れ、渭水の上流に軍勢を駐屯させて、逆賊を御征伐になれば、關東の忠義の士は必ず糧秣を備え馬に鞭打って陛下の軍をお迎えするでしょう。もし魏を捨て置いて呉を伐てば、一たび刃を交えると容易にはおさまりませんまい。御明察のほどお願い申し上げます。」^①と言いい、さらに「天下は重く、冤仇(あだ)は輕うございます。」と關羽を殺されて感情的になっている劉備を諫める。これも「趙雲傳」の裴注とほとんど同じである。前に引いた第九十五、九十六回では(本稿③の⑥)、無事に歸ってきた趙雲らを見て孔明がその理由を問うと、鄧芝が、すべて趙雲のおかげだと言う。そこで孔明が賞しようとする趙雲が辭して言う。

「全軍に少しの功も無く我々みなに罪があるのに、かえって恩賞を賜わりましては丞相の賞罰が不明瞭になります。これはとりあえず倉庫にお收め頂き、この冬を待って諸軍に賜わられても遅くはございますまい。」^②

これは、「趙雲傳」の裴注と表現は少し異なるが、内容的には同じである。

『三國演義』における趙雲像(上野)

これら趙雲の諫言は、「智將」趙雲の最も顯著な例である。「演義」の中で劉備を諫めるのは、孔明と趙雲ぐらいであるし、さらに軍師孔明に進言することは張飛などには思いもよらないことで、しかもその理論は非常に整然としたものである。趙雲の政治能力の高さをうかがわせる。董每戡氏は『三國演義試論』^③の中で、『演義』の第八十一回で趙雲が劉備を諫めたことを引用し、

「これらのことから見ると、劉備・關羽・張飛三人の氣量と認識は趙雲には遠く及ばない。とりわけ「興漢滅魏」というこの一大計畫の上においては。」^④

と書いて、趙雲の才能の高さを絶賛している。

これら④の「趙雲諫言」の場面について言えば、『三國志』の「趙雲傳」の趙雲の知的描寫を増やすことはなく、削ることもなく、そのまま寫しているだけである。

ここまでの(一)、(三)、(四)を通じて言えるのは、『三國志』から受け取れる印象では、趙雲は猛將というよりは智將の感じが強い、ということである。「趙雲傳」の中で具體的に趙雲の武勇を示す部分は、本文では長阪坡で阿斗を救っ

たことぐらゐで、裴注でも黃忠と張著を助けて大暴れをする
ことだけである（本稿注⑭参照）。それ以外に趙雲が戦つ
たという記述はあつても、いきいきと戦場を駆けまわつて
いる趙雲、という感じはあまり傳わつてこない。もちろん
實際の趙雲は戦場を駆け回り、敵將をなぎ倒したことであ
ろう。それは、楊戲の贊で趙雲が「猛將」と表現されてい
ることからもうかがわれる。しかしそれは「趙雲傳」の文
章からは傳わつてこないのである。

「趙雲傳」の本文と裴注のうち、趙雲の生前の記載の中
で、唯一『演義』に反映されていない部分がある。それは博
望で夏侯惇と交戦した時、雲が幼馴染みの夏侯蘭を生け捕
りにした。そして雲は蘭を推薦して軍正としたが、自分か
ら近づくことはしなかった、というものである。^⑮ここにあ
る「其愼慮類如此（その愼重な配慮はおよそこのようであ
つた）」ということばは、『三國志』の趙雲を象徴的に表わ
している。政治能力が高く、こまやかな配慮を見せる知的
な武將。それが『三國志』における趙雲のイメージである。
それに對して『演義』の趙雲はどうか。(一)、(三)で例をあ

げた部分では、狀況こそ『三國志』を參考にしているとは
言え、勇猛さにおいては、『演義』の趙雲は『三國志』の
趙雲とは比較にならないほどすばらしいものがある。この
點は、『三國志』の中でも大活躍する張飛とは異なる。し
かも、『三國志』の中に見られる趙雲の知的な部分はその
まま残している。

『演義』の趙雲像は、『三國志』の趙雲像とは異なつた
ものであつた。結局『演義』の作者は、『三國志』の智將
趙雲の知的な部分はそのまま『演義』に反映し、それに勇
猛さを大いに擴大して付け加えることによって、「文武兩
道」という『演義』における趙雲像を作り上げていったの
ではなからうか。

五 元雜劇の中の趙雲

先ほど述べたような「文武兩道」の趙雲像は、作者の故
意によるものなのか、それとも自然發生的にできあがつた
ものなのだろうか。それを考えるには、『演義』の中の趙
雲に關する記述がどこに由來するかを見る必要がある。

(二)、(三)、(四)までの結論を言えば、そのほとんどが『三國志』をもとにしたものである。『平話』についてはこれまでも少しずつ見て来たが、『平話』の趙雲についてここでまとめておく。

『平話』において趙雲が中心となって働くのは、前に挙げた長阪で阿斗を助ける話(本稿89ページ参照)と、周瑜が荊州を奪いに來るが、孔明の計を授けられた留守居役の趙雲が防ぐ話。そして桂陽の趙範を攻める話ぐらいである。しかしこのうち二つ目の話は『演義』には無いし、三つ目の話は『三國志』、『平話』、『演義』の三者がほとんど同じ内容で、『平話』は『演義』にわずかな影響が見られる程度である(本稿91ページ参照)。「演義」に大きな影響を與えているのは「長阪救主」だけである。

では『平話』の趙雲とはどういう人物か。『演義』のように劉備を諫める場面は無く、また初めに袁紹を説得した以外には知的なイメージを持つ場面は無い。結論としては、『平話』における趙雲は一般の武將と何ら變わらず、『平話』の趙雲が『演義』の趙雲に影響を與えていたことは

『三國演義』における趙雲像(上野)

ほとんど無さそうであるし、また『平話』の中において趙雲はあまり大きな存在ではない。それでは、『三國志』、『平話』以外にもう一つ、『演義』の成立要素である元代の雜劇のいわゆる「三國雜劇」はどうであろうか。

まず、正名に「趙雲」あるいは「趙子龍」という名前が入っているものはわずかに一つだけ。「趙子龍大鬧塔泥鎮」がそれである。この作品が元代のものか、明代のものか、つまり『演義』以前のものか、以後のものかはわからない。²⁵しかし、いずれにせよ、「趙子龍大鬧塔泥鎮」の本文は殘存せず、この正名しかわからない。正名に名前があるくらいだから恐らく趙雲が正末であったとは思われるが、その内容を類推することは困難である。塔泥鎮というものがどこにあったのかもわからない。『演義』にもそれに該当するような場面は無いので、この作品はたとえ元代作品であったとしても、『演義』には影響を及ぼさなかったと見ていいだろう。現存する元雜劇の三國劇は全部で二十一種ある。²⁶そのうち趙雲が登場するものは、「諸葛亮博望燒屯」(以下「博望燒屯」と略す)、「劉玄德獨赴襄陽會」(以下「襄陽會」と略す)、

「劉玄德醉走黃鶴樓」(以下「黃鶴樓」と略す)、「兩軍師隔江鬪智」(以下「隔江鬪智」と略す)、「陽平關五馬破曹」(以下「五馬破曹」と略す)、「壽亭侯怒斬關平」(以下「怒斬關平」と略す)の六種である。このうち「博望燒屯」は作者不明だが、元刊本にあるので確實に元代の作品。「襄陽會」は『錄鬼簿』によれば元の高文秀の作品。「黃鶴樓」は曹棟亭刊本の『錄鬼簿』によれば元の朱凱の作だが、『太和正音譜』や『也是園書目』では作者不明となっている。「隔江鬪智」、「五馬破曹」、「怒斬關平」の三つは作者もわからず、元代の作か、明代の作かは特定できない。

これら六種の作品のうち、「黃鶴樓」の第一折で趙雲は正末として登場する。「黃鶴樓」の第二折は、赤壁の戦いの後、孔明・關羽・張飛が不在の時、周瑜が劉備に黃鶴樓で酒宴を開こうと誘ってくる。趙雲は裏があるからとやめることを勧め、劉邦はただの宴會だから行けばよいと言い、二人は言い争うが、結局劉備は劉邦の言を容れて黃鶴樓へ向かう、という話。このあと第二折から第四折までに趙雲は出て来ないので、この「黃鶴樓」においてさして重要な

役割を果たしているとは思えないし、「黃鶴樓」という話は『平話』をもとにしているが、『演義』には無いので、「黃鶴樓」の趙雲は『演義』の趙雲には影響を与えていないと言っているだろう。ただ、正論で劉備を説得するなど、知的な趙雲の姿を垣間見ることができる。

「博望燒屯」では、まず第一折で雲は、關羽・張飛とともに臥龍岡に孔明を訪ねている劉備に、甘夫人の男兒出生を傳えに来る。第二、三折では、孔明の指示を受け、夏侯敦^④にわざと負けて博望城に誘い込む役を、第四折では、孔明の説得に來た管通に備え、孔明の指示で隣室に控えるという役をする。この「博望燒屯」が『演義』に影響を与えているのは明らかで、「博望燒屯」に關しては『平話』、『雜劇』、『演義』と段階的に發展していった、という高橋繁樹氏の指摘がある。^⑤しかし、趙雲に關して言えば、『演義』に反映されているのは博望坡の戦鬪場面だけであり、それでも趙雲の役割はそれほど大きいものではない。

「襄陽會」では、第二折の後の楔子で、趙雲は劉備の命令で徐庶を迎えに行く。そして第三折では、徐庶の命によ

り曹軍との戦闘で伏兵となる。『演義』では、趙雲は前に述べたように(本稿93ページ参照)劉備に同行して襄陽へ赴くことになっており、徐庶を招きに行く場面も無いので、「襄陽會」の趙雲は『演義』の趙雲には影響していないと言える。

「隔江鬪智」³⁾では、趙雲は孔明に新野へ軍勢を整えに行くよう命令を受けるだけ。「怒斬關平」でもほんの端役で、二人の賊將を自分が捕えに行く主張するだけである。

「五馬破曹」では、孔明に策を授けられて陽平關を奪い、續いて密林に埋伏して曹軍を破る。この三種では、趙雲はあまり重要な役割は果たしておらず、『演義』への影響もほとんど無いと言っているし、また明代の作の可能性が高い作品であるので、『演義』への影響を論じるのは危険である。

元雜劇では、主要な人物が初めて登場する時に、まず詩をうたってから自己紹介に入ることが多い。趙雲は「博望燒屯」ではその詩の中に、

//幼年販馬爲商賈//

『三國演義』における趙雲像(上野)

とあり、「襄陽會」と「五馬破曹」では、

//幼年販馬走西戎//

とある。若い頃は馬商人で西戎まで行った、というのである。馬商人ということか、馬商人の用心棒という意味かも知れないが、いずれにしても血の氣の多い荒くれであった、ということである。要するにイメージとしては、張飛と何ら變わらなかったことになる。そして、雜劇の中の趙雲の行動をまとめて見ても、「黃鶴樓」を除いては普通の武將としか言いようがない。こうした元雜劇における趙雲のイメージは『演義』におけるそれとは、かなり離れていることがわかる。

元雜劇の中の趙雲をここまで見て來たが、結局趙雲は元雜劇においても、『平話』と同様、比較的地味な存在であった。そして、『演義』の中の趙雲に反映されているような部分もあまり無かったと言ってよからう。

これによって、『演義』における趙雲像は主として『三國志』をもとにして、『演義』の作者がつくっていったものである、と言えよう。

では、『平話』においても雜劇においてもあまり目立たない存在であつた趙雲が、なぜ『演義』では比較的大きな存在となつたのであろうか。

六 五虎大將における趙雲の位置

『演義』の第七十三回。劉備が漢中王となつた後、部下の官爵を定めている。そして、五人の大將を「五虎大將」に封じている。弘治本を見ると、次のようになっている。

「封許靖爲太傅，法正爲尙書令。諸葛亮爲軍師，總督軍馬一應事務。封關、張、馬、黃、趙爲五虎大將，魏延漢中太守。」

ところが、毛宗崗本の五虎大將の記載は、

「封關羽、張飛、趙雲、馬超、黃忠爲五虎大將。」

となつていて、こちらでは趙雲は三番目になっている。

他の版本を見てみると、時期的には弘治本より後で毛宗崗本よりも前にあたる李卓吾本では、

「封關羽、張飛、馬超、黃忠、趙雲爲五虎大將。」

となつている。また、毛宗崗本よりさらに後のものではあ

る李笠翁本の記載を見ると、やはり、

「封關羽、張飛、馬超、黃忠、趙雲爲五虎大將。」

となつている。結局、『演義』の版本のうち、趙雲を五虎大將の三番目に持つてきているのは、毛宗崗本だけである。

『平話』では、陽平關で馬超を降らせた後、《皇叔封五虎將》と題して、

「關公封壽亭侯，張飛封西長侯，馬超封定遠侯，黃忠封定亂侯，趙雲封立國侯。皇叔恩封五虎將，……」

とある。ここでは五虎大將の順位は書かれていないが、その前に五人の大將を侯に封じた順番から、關羽、張飛、馬超、黃忠、趙雲の順であつたと考えていいだろう。

この五虎大將の順序に果たして意味があるのか、という問題がある。『演義』の第七十三回の五虎大將に封じた後の部分で、前部司馬の費詩が使者となり荊州の關羽のところへ向かう場面がある。次に引用する。

雲長問曰：「封某何爵？」詩答曰：「王上加五虎大將之職，將軍居其一也。」（雲長が尋ねた。「それが

しに何の官爵を授けられたのか。」費詩が答えて言う。

「王は『五虎大將』の職をお加えになりました。將軍はその筆頭でございます。」

この後、なぜ黃忠と同列か、と關羽が怒るわけだが、ここで費詩が、關羽が五虎大將の筆頭である、と言っていることを考えると、やはり五虎大將の順位は存在すると言つてよからう。

正史ではどうなっているか。『五虎大將』ということばは『三國志』には出て來ない。^⑤『三國志』『蜀書』の列傳は、『劉二牧傳』、『先主傳』、『後主傳』、『二主妃子傳』、『諸葛亮傳』のあとに、『關張馬黃趙傳』がある。この順序は、弘治本の順と同じである。

正史の中の趙雲は常に五番目の武將であつた。『先主傳』によると、劉備が益州の牧になった時（建安十九年）に、

「先主復領益州牧、諸葛亮爲股肱、法正爲謀主、關羽、張飛、馬超爲爪牙、許靖、麋竺、簡雍爲賓友。」

とある。趙雲と黃忠の名は見えない。さらに、『先主傳』で建安二十四年秋に群臣が劉備を漢中王に推舉し、漢中王

『三國演義』における趙雲像（上野）

に上表した文の書きだしは次の通りである。

「平西將軍都亭侯臣馬超、左將軍長史領鎮軍將軍臣許靖、營司馬臣龐羲、議曹從事中郎軍議中郎將臣射援、軍師將軍臣諸葛亮、盪寇將軍漢壽亭侯臣關羽、征虜將軍新亭侯臣張飛、征西將軍臣黃忠、鎮遠將軍臣賴恭、揚武將軍臣法正、興業將軍臣李嚴等一百二十人上言曰」

ここで馬超が第一番目に名前があるのは、馬超が朝廷から正式に任命された將軍であるからだと思われるので、^⑥蜀の實際の順位とは關係ないであろう。ここでは趙雲はその他大勢の中の一人である。

また『資治通鑑』の獻帝建安二十四年秋七月、劉備が漢中王になった時の記載は、

「備還治成都、以許靖爲太傅、法正爲尙書令、關羽爲前將軍、張飛爲右將軍、馬超爲左將軍、黃忠爲後將軍、餘皆進位有差。」

となっている。これは、『三國志』でも各人の列傳には載っているが、このようにまとめた記載は無い。ここで

も趙雲の名は無く、關羽、張飛、馬超、黃忠と順位がつけられている。「趙雲傳」によれば、この建安二十四年には翊軍將軍であつたやうで、蜀軍の官制がわからないので、趙雲が蜀軍の中でどのあたりの地位にいたのかは不明だが、少なくとも、この時點では四人より下であつたやうである。

さらに後主の時に、すでに死亡している功臣に諡が贈られ、趙雲も順平侯という諡を贈られた。しかし、關羽ら四人は景耀三年秋に贈られたのに對して、趙雲が贈られたのは、一人だけ遅れて翌年春のことであつた。^④

正史の中の趙雲は、五番目（あるいはそれ以下）の一番似合う武將だつたやうである。

結局、趙雲を五虎大將の三番目に持つてきているのは、『演義』の毛宗崗本だけであつた。従つて、それは毛宗崗（もしくは毛聲山）の意志であつたやうである。ではその理由は何であらうか。それは正史と異なり、『演義』の趙雲の活躍が馬超や黃忠のそれをはるかに凌いでいるからである。^⑤ それでは、正史での五番目の武將趙雲が、武將のうちで三番目の活躍をするのはいつからか。これまで見てき

たように、趙雲に關する記載が主に『三國志』によるものであつて、『平話』でも雜劇でもそれほど大きな働きはしていなかつたことを考えてみると、趙雲が三番目の武將となつたのは『演義』以降であると考えられる。つまり、『演義』の中で趙雲にこのような活躍をさせたのは『演義』の作者である。

七 『演義』の作者の意圖

趙雲は正史（主に『三國志』）の中では、地味な存在の、まさに五番目の武將であつた。しかも武よりも智が優つたやうな印象を受けるが、そのような『三國志』の趙雲を、『演義』の作者が武力と知性のともに人竝みはずれた第三番目の武將に仕立てあげた。それが『演義』の作者の故意によるものであつたと予想されることは既に述べた。ではその意圖を考えてみよう。まず、このような趙雲像を作りあげた意圖は、一つには趙雲と張飛とを對照させる効果が挙げられるであらう。

登場人物を對照的なタイプにすることによって、それぞ

れの個性をより明確にするという手法は、中國の小説や雜劇などではよく見られる。『西遊記』における三藏、悟空、八戒、悟淨の四人の性格などはそのいい例である。特に張飛に代表されるような暴れん坊は、大衆に最も好まれるタイプである。張飛、悟空、八戒、そして『水滸傳』の魯智深、李逵などが同系統の人物であることは、すでに指摘の多いところであるが、^④彼らのようなタイプは、講談や雜劇において大きく發達したものであろう。難しい説教よりも、彼らの武勇談、失敗談に拍手喝采する聴衆、觀客たちが目に浮かぶ。その講談や雜劇の延長線上にある『演義』や『水滸傳』などにおいても、當然張飛や魯智深らが大活躍や大失敗をして、讀者を喜ばせるのである。

『演義』の主要登場人物はそれぞれに異なつた個性を持っているのだが、特に張飛と趙雲の對比は鮮明である。武力一邊倒ですぐに感情的な行動をとる張飛に對して、文武兩道で沉着冷靜な趙雲。張飛はしばしば失敗をやらかすのに對して、趙雲はほとんど失敗をせず、常に全力を盡くす優等生。というように全く對照的に描かれている。このこ

『三國演義』における趙雲像（上野）

とは『演義』の第八十一回（本稿96ページ参照）、劉備の吳遠征の時に如實にあらわれる。趙雲が正論で諫めているのを聞かず、劉備は張飛の感情的な意見を聞き入れ、その結果、張飛も劉備も命を落とすことになるのだ。

ただし、趙雲が張飛と對照的とは言っても兩者は對等に描かれているわけではない。先ほど述べたように、張飛は大衆に非常に人氣のある人物である。その張飛の性質をより際立たせるための、趙雲は極端に言えば引き立て役なのである。長阪の戦い（本稿③の(a)、89ページ）でも、阿斗を抱いて息も絶え絶えにたどり着いた趙雲を張飛が迎えて追撃を食い止め、あの有名な「據水斷橋」へとつながっていくし、「截江奪幼主」（本稿③の(b)、90ページ）でも、立ち往生していた趙雲を助けて周善を殺すのは張飛であつて、最終的にけりをつけるのはいつも張飛の方である。

張飛と趙雲について見てきたので、劉備の部將の中の筆頭である關羽と趙雲についても見ておく。

關羽という人物は、張飛の要素と趙雲の要素の兩方を持つているように思われる。その勇猛さ、豪快さが、張飛に

優るとも劣らないことは明らかである。いわゆる『千里獨行』をはじめとする關羽の武勇を示す話は數知れない。そういう非常に豪快な點が、趙雲との相違點であるとも言える。しかし、そのほとんどの場合において、關羽は常識のある行動をとる。この點では趙雲と同様である。董卓が傲慢な態度をとったため激昂する張飛をおさえる場面（第二回）、孔明が晝寢をして劉備を待たせていることに怒って、「火をつけてやる」と騒ぐ張飛をとどめる場面（第三十八回）などにあらわれる。

關羽の性格で趙雲と違う點として、非常に義理がたく、プライドの高いことがあげられる。關羽が劉備に對して忠實であることはもちろんであり、趙雲と同じであるが、赤壁の戦いの後に曹操を追いつめながら見逃してやる場面（第五十回）に見られるように、彼の義理がたさは敵軍の將にまで及ぶのである。關羽のプライドの高さは、馬超と手合わせをしたいと孔明に伝えたり（第六十五回）、五虎大將に任じられた時に黃忠と同等であることを怒る場面（第七十三回）にあらわれる。これらの點は、常に何も文

句を言わず黙々と責務をこなす趙雲とは異なる點である。

ただ、關羽と趙雲の關係、對比というものはあまり鮮明ではない。それは、これまで述べてきた彼らの性格の違いがそれほど大きくないことが一つ、そしてもう一つは、この二人が個性をぶつけあう場面が無いことによると思われる。『演義』の中で、彼らが意見をかわしあったり對立したりする場面は一つも無いし、また一緒に戰闘に参加する場合でも二人だけのことはなく、常に張飛ら、他の將軍たちと一緒にいるのである。『演義』の中では、關羽と張飛、そして張飛と趙雲は一緒に行動することも多く、それだけ對比もはっきりしている。これには關・張・趙というランクも關係しているのかも知れない。つまり關羽と趙雲では全ての點で關羽が優っており、役者が違ったということである。なにしろ關羽は神と崇められるほど大きな存在であったのだから。あるいは、關・張と張・趙の關係がはっきりしていて、關・趙の關係がはっきりしないということは、『演義』では張飛を中心として他の人物の性格づけが行なわれたとも考えられる。

さて、趙雲が登場はするが中心的な役割ではない場面は、『三國志』によれば趙雲は關係しておらず、『演義』の作者の創作と思われる、ということはずで述べた(本稿95ページ)。その例が(三)の(d)(本稿93ページ)の「檀溪」であり、(三)の(e)(本稿94ページ)の「錦囊計」である。(三)の(d)では、劉備の伴をするために、(三)の(e)では、劉備に同行しなおかつ計畫を正確に遂行できる能力がある者として、趙雲が使われていた。この他趙雲は、徐庶の指揮で曹仁を打ち負かしたり(第三十六回)、赤壁の戦いの時に呉から歸る孔明を迎える役(第四十九回)、同じく赤壁の戦いで敗走する曹操を關羽、張飛とともに待ち伏せをする役(第四十九、五十回)などをする。趙雲が起用されているのは、このように劉備の護衛であるとか、關羽、張飛以外にもう一人將軍が必要な場合であり、結局『演義』の作者は、どんな場面にも使うことのできる便利な人物として、趙雲を起用したという事が言えそう。趙雲は比較的早くから劉備に仕えていたため格好の人物である。どんな場面でも使えるためには、敵への脅威のために武力にすぐれていて、(三)の(d)、(e)

『三國演義』における趙雲像(上野)

のような知性を必要とする場面のために頭腦も明晰であれば言うことはない。趙雲が知的なことは「趙雲傳」からも明らかである。そこで『演義』の作者は、趙雲の知的部分はそのままだに、武勇をことさらに誇張したのではなからうか。これが『演義』の作者の意圖の第二であると考えたい。

『演義』の作者が、五番目の武將趙雲に三番目の武將となるような活躍をさせた理由としては、この章でこれまで述べてきたような役割を趙雲に與えることによって、自然にそうなったということが考えられる。しかしもう一つ、劉備、關羽、張飛の死後、どうしても役者不足になるのを補う意味があったのではなからうか。劉備ら三人の死後は孔明しかない。しかし、できるだけ史實に忠實であろうとした『演義』の作者は、死んでいるはずの者を生かすわけにもいかない。その點、關羽、張飛、馬超、黃忠、趙雲の五人の將軍のうち、一番最後まで生きていた趙雲は、最も都合な人物であった。趙雲が中心的な役割を果たす話、そのほとんどが『三國志』の「趙雲傳」にあったが、唯一『三國志』にも『平話』にも典故のない、つまり『演

義』の作者の創作と考えていい話が、劉備ら三人の死後の第九十二回(本稿91ページ参照)にあることに、それがあらわれている。

『演義』の作者の趙雲に對する肩入れは激しいように感じられる。張飛などは『平話』での荒唐無稽さが『演義』では抑えられている部分もあるのに、逆に趙雲は『三國志』や『平話』とは比較にならないほどの大活躍である。『演義』の作者は趙雲を關羽、張飛クラスの武將に引き上げようとしていたのかも知れない。

しかし、趙雲一人だけでは役者不足を補なうことはできない。そこで、『三國志』にはほとんど詳しい記載の無い關興や張苞が活躍することになる。それはあたかも、劉備、關羽、張飛を失った讀者に對して、まだ趙雲も關羽、張飛の二世たちもいるのではないかと慰めているかのようである。しかしそれでもなお、劉備ら三人のいなくなった寂しさはおおい切れない。『演義』における劉備、關羽、張飛の存在はあまりにも大きいのである。

八 おわりに

『演義』は、劉備、孔明、關羽、張飛らを中心に話が展開していき、それに合わせて他の人物が動いている、といった印象を受ける。趙雲はそのような軸になる人物にはなり切れないが、彼らに振り回されているわけでもない。趙雲は與えられた役割を忠實に、正確にこなしていたのである。

『演義』、『平話』、『三國志』、雜劇など、それぞれにそれぞれの顔をした趙雲がいた。しかし『演義』の趙雲が一番親しみやすい。少年として登場し、老將となるまで頑張って、そして死んでいった趙雲。まさに、『演義』の中でその一生を全うしたのである。

注

- ① 凌影『三國演義縱橫談(一)』(一九七六年・中華書局香港分局)「十七、膽大心細的趙雲」
- ② 『演義』の作者は羅貫中であるというのが通説となっているが、絶対に間違いないとは言いい切れない。本稿では作者の

意圖などを考えていくので、全て『演義』の作者」と表現することとする。

③ 『演義』は、『三國志』、『平話』と比較する必要上、最も古い刊本とされる通稱「弘治本」『三國志通俗演義』 一九八〇年・上海古籍出版社）を使用した。以下、『演義』とだけある場合は全て「弘治本」を意味する。

④ 陳壽『三國志』のテキストとしては、『三國志』（一九五九年・中華書局）を使用した。

⑤ 『平話』は排印本（『三國志平話』・一九五五年・上海古典文學出版社）と影印本（『至治新刊全相平話三國志』・上海涵芬樓影印）の兩方をテキストとして使用した。

『演義』の成立要素としては、『三國志』と『平話』、元雜劇、さらにそれ以外の講談などがあるわけだが、『平話』は元代初期の成立とされており、時期的には元雜劇よりも前である。なお、元雜劇については第五章で述べるが、その他の講談などについては、現存する資料が皆無であるので、觸れないこととする。

⑥ 「弘治本」には、章回の回数はいっていないが、便宜上「毛宗崗本」の回数に據った。

⑦ 瓚遣先主爲田楷拒袁紹，雲遂隨從，爲先主主騎。

⑧ 雲別傳曰：時先主亦依託瓚，每接納雲，雲得深自結託。

雲以兄喪，辭瓚暫歸，先主知其不反，捉手而別，雲辭曰：「終不背德也。」先主就袁紹，雲見於鄴。先主與雲同床臥臥，

『三國演義』における趙雲像（上野）

密遣雲合募得數百人，皆稱劉左將軍部曲，紹不能知。遂隨先主至荊州。

⑨ 值曹公軍至，追及先主於當陽長阪，虧時困憊，棄后及後主，賴趙雲保護，得免於難。

⑩ 先主轉軍廣陵海西，竺於是進妹於先主爲夫人。

⑪ 『三國演義』の文學（『中國の八大小説』・昭和四十年・大阪市立大學中國文學研究室）より採録。

⑫ 雲別傳曰：從平江南，以爲偏將軍，領桂陽太守，代趙範。範寡嫂曰樊氏，有國色，範欲以配雲。雲辭曰：「相與同姓，卿兄猶我兄。」固辭不許。時有人勸雲納之，雲曰：「範迫降耳，心未可測，天下女不少。」遂不取。範果逃走，雲無纖介。

⑬ この話は『平話』にもあり、範の嫂を勧められて雲が大いに怒る點、範が反亂する點などで『演義』と共通しており、これらは『平話』をもとにしたものであろう。

⑭ 「趙雲傳」裴注 雲別傳曰：夏侯淵敗，曹公爭漢中地，運米北山下，數千萬囊。黃忠以爲可取，雲兵隨忠取米。忠過期不還，雲將數十騎輕行出圍，迎視忠等。值曹公揚兵大出，雲爲公前鋒所擊，方戰，其大衆至，勢偪，遂前突其陳，且鬪且卻。公軍敗，已復合，雲陷敵，還趣圍。將張著被創，雲復馳馬還營迎著。公軍追至圍，此時沔陽長張翼在雲圍內，翼欲閉門拒守，而雲入營，更大開門，偃旗息鼓。公軍疑雲有伏兵，引去。雲雷鼓震天，惟以戎弩於後射公軍，公軍驚駭，自相踐踐，墮漢水中死者甚多。先主明且自來至雲營圍視昨戰處，曰

：「子龍一身都是膽也。」作樂飲宴至暝，軍中號雲爲虎威將軍。」

⑮ 明年（建興六年），亮出軍，揚聲由斜谷道，曹真遣大眾當之。亮令雲與鄧芝往拒，而身攻祁山。雲、芝兵弱敵彊，失利於箕谷，然斂衆固守，不至大敗。軍退，貶爲鎮軍將軍。」

⑯ 毛宗崗・三國志演義回評・第三十五回（全圖綉像三國演義）一九八一年・內蒙古人民出版社）「若使翼德處此，必殺蔡瑁，若使雲長處此，縱不殺蔡瑁，必拿住蔡瑁，要在他身上尋還我兄，安肯將蔡瑁輕輕放過，却自尋到新野，又尋到南漳乎？三人忠勇一般，而子龍爲人又極精細，極安頓。」

⑰ 第八十一回的諫言的本文は次の通り。

趙雲諫曰：「國賊曹操非比孫權也，宜先滅其魏，則吳自服矣。今曹丕謀篡漢帝，神人共怒。陛下可早圖關中，屯兵渭河上流，以討凶逆，關東義士必裹糧策馬，以迎王師也。若捨魏而伐吳，兵勢一交，豈能解焉？願陛下察之。」先主曰：「孫權害了朕弟，又兼糜芳、傅士仁、潘璋、馬忠皆有切齒之仇，恨欲食其肉而滅其族，方雪朕之願也！卿何阻耶？」雲又曰：「天下者，重也；寇仇者，輕也。乞陛下詳之。」

⑱ 雲別傳曰：孫權襲荊州，先主大怒，欲討權。雲諫曰：「國賊是曹操，非孫權也，且先滅魏，則吳自服。操身雖斃，子丕篡盜，當因衆心，早圖關中，居河、渭上流以討凶逆，關東義士必裹糧策馬以迎王師。不應置魏，先與吳戰；兵勢一交，不得卒解也。」

⑲ この趙雲の言の本文は次の通り。

子龍辭曰：「三軍無尺寸之功，某等俱各有罪；若蒙反受其賞，乃丞相賞罰不明也。且請寄庫，俟今冬賜與諸軍未遲。」

⑳ 雲別傳曰：亮曰：「街亭軍退，兵將不復相錄，箕谷軍退，兵將初不相失，何故？」芝答曰：「雲身自斷後，軍資什物，略無所棄，兵將無緣相失。」雲有軍資餘絹，亮使分賜將士，雲曰：「軍事無利，何爲有賜？其物請悉入赤岸府庫，須十月爲冬賜。」亮大善之。

㉑ 董得哉『三國演義試論』（一九五六年・上海古典文學出版社）

㉒ この原文は次の通り。

「由這些地方看來，劉備、關羽、張飛三人的氣量和認識都不及趙雲，尤其在興漢滅魏這一大計上。」

㉓ 『三國志』「蜀書・楊戲傳」：「征南厚重，征西忠克，統時選士，猛將之烈。贊趙子龍、陳叔至。」

征南は征南將軍であつた趙雲のこと、征西は征西將軍であつた陳到（字は叔至）のことである。

㉔ 「趙雲傳」裴注：「先是，與夏侯惇戰於博望，生獲夏侯蘭。蘭是雲鄉里人，少小相知，雲白先主活之，薦蘭明於法律，以爲軍正。雲不用自近，其愼慮類如此。」

夏侯蘭は『演義』では第三十九回に夏侯惇の副將として登場。博望坡で張飛の槍の一突きで戦死する。

㉕ 傅惜華氏はこの曲を『元代雜劇全目』（傅惜華著・中國戲

曲研究院編・一九五七年・作家出版社）ではなく、『明代雜劇全目』（一九五八年・作家出版社）の中に載せている。『明代雜劇全目』にも、『古典戲曲存目彙考』（莊一拂編著・一九八二年・上海古籍出版社。この本は闕名作品に關しては元と明の區別をしていない。）にも『寶文堂書目』にしか見えないとあるので、それを見てみる。『寶文堂書目』（晁氏寶文堂書目・徐氏紅雨樓書目）一九五七年・古典文學出版社）は明の晁瑛及びその子東吳の藏書目で、嘉靖年間に編まれたらしい。その『寶文堂書目』の「樂府」の項目に「趙子龍大鬧塔泥鎮」はある。その周邊の書名をその順序のまま次に列舉し、そのうち作者及び時代を特定できるものについては括弧内に記すこととする。（雜劇の作者については、前出の『元代雜劇全目』、『明代雜劇全目』、『古典戲曲存目彙考』に據った。）

關大王單刀會（元刊本があるので元代）

馬陵道

杜牧之詩酒揚州夢（元代・喬吉）

（五種省略）

麗春堂（元代・王德信）

賢達婦京娘盜果

趙子龍大鬧塔泥鎮

別虞姬（元代・張時起）

『三國演義』における趙雲像（上野）

（二種省略）

肅清瀚海平胡傳（明代・朱權）

（二種省略）

迷青瑣倩女離魂（元代・鄭光祖）

（六種省略）

卓文君私奔相如（明代・朱權）

（三種省略）

傷梅香諷翰林風月（元代・鄭光祖）

（六種省略）

呂洞賓三度城南柳（明代・谷子敬）

（十四種省略）

孤雁漢宮秋（元代・馬致遠）

掛甲朝天（元代・武漢臣）

こうしてみると、元代のものと明代のものが雜然と入り混じっており、並び方に一定の法則というものは無いように感じられる。とすれば、「趙子龍大鬧塔泥鎮」は元代のものである可能性もある、ということになる。

②⑥ 郭英德「淺談元雜劇三國戲的藝術特徵」（『三國演義研究集』一九八三年・四川省社會科學院出版社） // 現存的元雜劇三國戲有：《元刻古今雜劇三十種》中的《單刀會》、《雙赴夢》（以上關漢卿作）、《博望燒屯》三種、《脈望館抄校本古今雜劇》中的《單刀會》、《襄陽會》（高文秀作）、《三戰呂布》（鄭

光祖作)、《黃鶴樓》、《博望燒屯》、《連環計》、《千里獨行》、《桃園演義》、《單刀劈四寇》、《杏林庄》、《單戰呂布》、《三出小沛》、《石榴園》、《龐掠四郡》、《陳倉路》、《五馬破曹》、《怒斬關平》、《娶小喬》等十八種、《元曲選》中的《王粲登樓》(鄭光祖作)、《連環計》、《隔江鬪智》等三種、刪去重複的六種、計有存本二十一種。²⁷

²⁷ 徐心君校點『新校元刊雜劇三十種』(一九八〇年・中華書局)を参照した。

²⁸ これらの時代及び作者は、前出の『元代雜劇全目』、『古典戲曲存目彙考』、『錄鬼簿(外四種)』(一九七八年・上海古籍出版社)を参照した。

²⁹ 「隔江鬪智」以外の五種のテキストは全て「脈望館鈔校本古今雜劇」を使用した。

³⁰ 「黃鶴樓」に關しては、高橋繁樹「劉玄德醉走黃鶴樓」の考察—三國平話と三國雜劇(4)—、『佐賀大學教養部研究紀要』8に詳しい。

³¹ 正史、『演義』では夏侯惇だが、『平話』、雜劇では夏侯敦となっている。

³² 「諸葛亮博望燒屯」の考察—三國平話と三國雜劇(3)—、『中國古典研究』20・早大中國古典研究會を参照した。

³³ 「隔江鬪智」のテキストとしては『元曲選』(一九五八年・中華書局)を使用した。

³⁴ 毛宗崗本のテキストとしては、『毛聲山批評三國志』(芥子

園刊本・京大文學部藏)を使用した。

³⁵ 『李卓吾先生批評三國志』(京大人文科學研究所藏)を参照した。

³⁶ 『李笠翁批閱三國志』(京大文學部藏)を参照した。なお、李笠翁本と毛宗崗本の關係などについては、小川環樹博士の「『三國演義』の毛聲山批評本と李笠翁本」、『中國小說史の研究』一九六八年・岩波書店に詳しい。

³⁷ 史書の中で「虎將」あるいはそれに近いことばがでてくるのは、まず『漢書』の「王莽傳」。

「莽拜將軍九人，皆以虎爲號，號曰「九虎」」
さらに『三國志』「吳書」の「諸葛瑾傳」。

「聞任陳長文、曹子丹輩，或文人諸生，或宗室戚臣，寧能御雄才虎將以制天下乎？」

『演義』の中では「虎將」は官名として出てくる。「王莽傳」の方はそれに近いが、「諸葛瑾傳」では「勇武の將」というぐらいの意味で使われているようだ。

丘振聲氏は『三國演義縱橫談』(一九八三年・瀋江出版社)の「誰封的五虎將」の中で、『水滸傳』の第七十一回で宋江が大刀關勝、豹子頭林沖、霹靂火秦明、雙鞭呼延灼、雙鎗將董平の五人を「馬軍五虎將五員」に封じており、また第六十回で曾頭市の曾家の五子が武藝に秀でており「曾家五虎」と呼ばれていることを挙げ、當時「五虎將」あるいは「虎將」ということばがよく使われていたことを指摘している。

『演義』の五虎將については、『平話』に見られることから、おそらく『平話』以前の講談、あるいは雜劇の中で生まれたものであろう。

③⑧ 「馬超傳」によると超は偏將軍に任命されている。

「…以超爲偏將軍，封都亭侯，…」

③⑨ 「趙雲傳」成都既定，以雲爲翊軍將軍。建興元年，爲中

護軍，征南將軍，封永昌亭侯，遷鎮東將軍。」

④⑩ 「趙雲傳」(建興)七年卒，追諡順平侯。」

④① 「後主傳」に記載がある。

「(景耀)三年秋九月，追諡故將軍關羽，張飛、馬超、龐統、黃忠。

四年春三月，追諡故將軍趙雲。」

④② 陳邇冬「替趙子龍抱不平」(《光明日報》一九八三年六月四日)

「毛本」五虎將「列爲關、張、趙、馬、黃，把《三國志》列傳和羅氏原本的次序：關、張、馬、黃、趙的，趙「提高到第三位，一是趙雲與劉備的關係，僅次於關、張；二是演義中寫趙雲事跡與功勞，實多於馬、黃。」

④③ 田中謙二・荒井健「『西遊記』の文學」(《中國の八大小説》)に詳しい。

④④ 小川環樹「『水滸傳』の文學」(《中國の八大小説》)には、
「魯智深らの痛快至極な無法者の性格は、『三國演義』では張飛となつてあらわれる。これは全く同じタイプの人物で

『三國演義』における趙雲像(上野)

ある。」

とあり、注④③でも引いた「『西遊記』の文學」には、

「このような悟空の性格と行動は、おそらくすべての人間の共感をあつめるだろう。この形象は疑いもなく庶民のうちに生まれ育つたものであり、すでに指摘されたとおり、『水滸傳』の魯智深・李逵、『三國演義』の張飛に通ずるものである。」

④⑤ 『三國志』には、關興については「關羽傳」に、

「子興嗣。興字安國，少有令問，丞相諸葛亮深器異之。弱冠爲侍中、中監軍，數歲卒。」

とある。張苞については、「張飛傳」に、

「長子苞，早夭。」

とあるだけである。それに對して『演義』では、張苞は第八十一回、張飛が死んだ直後に登場。關興は第七十四回に關羽の使者となる部分があるが、實質的な登場は張苞と同じ第八十一回である。そして、張苞は第九十九回まで、關興は第一百回まで蜀の大將として活躍する。

(補注) 趙雲と劉備は、これ以前に二度會っている。最初は第七回。袁紹と戰う公孫瓚を劉備らが助けた時で、この時すでにお互いに離れ難い感情を抱いている。

「(公孫瓚)教與趙雲相見。玄德甚相愛敬，便有不捨之心。

……

瓚班師回。趙雲與玄德分別，玄德執雲手垂淚，不忍相離。雲嘆曰：「某曩日將謂公孫乃當世之英雄，今觀所爲，袁紹等輩耳。」玄德曰：「將軍且堅心事之，相見有日。」洒淚而別。」

これは『三國志』「趙雲傳」の表注に「時先生亦依託瓚，每接納雲，雲得深自結託」とあることに基づくものであらう。二度目は第十一回、徐州の陶謙を救いに行くため、公孫瓚から兵と趙雲を借りた時。この時も二人は涙ながらに別れる。

注で引用しなかった主な参考圖書を次に記しておく。

小川環樹・金田純一郎譯『完譯三國志』(一)～(八)(昭和五七、五八年・岩波書店)

立間祥介譯『三國志演義』上・下(昭和四七年・平凡社)
今鷹眞・小南一郎・井波律子譯『三國志』Ⅰ・Ⅱ(『世界

古典文學全集』第二十四卷・昭和五二・五七年・筑摩書房)

本田濟編譯『漢書・後漢書・三國志列傳選』(『中國の古典シリーズ』3・昭和四八年・平凡社)

朱一玄・劉毓忱編『三國演義資料彙編』(一九八三年・百花文藝出版社)